

英語能力差に対する指導法の改善（中・高）

— 英語能力差の実態と対策 —

加藤 剛 倉田有邦 高橋みな子 盛田義彦 高橋恵亮

要 旨

学力差の実態とその原因を明らかにし、学力下位生徒だけでなく、上位者・中位者に対してもその能力差に応じた指導を、自然学級においてはどのようにすべきか。能力別学級編成の方法・時期・指導法の研究を行なう。

I はじめに

最近能力開発の教育と能力別指導が教育界において大きな関心と呼ぶようになってきた。さらにその傾向は教育界にとどまらず、広く産業界や一般社会において広く見られるところである。世界各国でもこの問題を積極的にとりあげ、研究実践しているようである。わが国の英語教育関係者の間においても、この問題は重要関心事であり、昭和40年文部教研の中学英語科の全国共通主題として、「能力差に応ずる指導をどうしたらよいか。」という問題がとりあげられた。この際は「能力差」の意味、指導法の研究、特に「下位生徒を引き上げ、できるだけ能力差を少なくする指導法」が多くとりあげられた。これも重要な問題であるが、「能力差」を考える場合、もう一つ語義通りの「能力差に応じた指導法」を考えることも大切であると思われる。いままで、ややなおざりにされていた学力上位者、中位者に対する指導法の研究も積極的にすすめる必要があると思われる。

本校英語科では過去10年間、発音指導、語法、読解、文型学習、作文などについて研究をすすめ、学習困難点を解明してきた。また学力遅進生徒の実態を調べ、高3では能力別学級を編成してその指導に当たってきた。われわれは過去の研究の成果をふまえて、よりよい能力差に応じた指導の研究をしてみたいと思う。

II 文型、英作文における学力差とその指導

中学——特に入門期には、かなりのドリルをするので、学力下位の生徒にあっては入門期に習った文型

を、その後習う文型にまであてはめようとするものがある。

1年で一般動詞に入った時に、前に習った be 動詞の影響で I am like……とか、Are you play ……? などといった型になることがしばしばある。これは学力下位生徒にあっては、2年、3年になっても時々見られるところである。2年生で You are have to work, He is make his parents happy. などと書く者がかなりいる。中学英語においては必修文型が教える学年まで指定されているが、教科書により、その回数にかなりの差がある。この頻度が低い場合は、学力上位者と下位者との差は大きくなっている。現在の英語教科書にあっては、大部分の文型、その他重要事項が集中的に書かれていて、その後は一応学習が出来たものとしてあまり現われない。

外国語学習において、学習効果をあげるには、集中的な drill とともに、Divided Practice の必要性は広く知られているところである。われわれは、学習後2、3日のうちに意識的に復習することによって、最初の学習を深めるとともに、教科書の不備を補ってその後も時折適当な計画をもって復習するように指導している。

種々の学習困難点の学習には文型の指導がある程度有効な一つの方法であると考えられるが、いわゆる pattern practice はともすれば、speed 重視のため、文の形式面の drill だけに力が注がれ、context や真の意味が軽視され単なる機械的な substitution に終わってしまうおそれがある。下位の生徒でもすらすらと pattern practice をするので、かなり学習効果があがっていると思っていると、全然意味を理解せずに云っていることがある。反復の効果に大きな影響力を持つのは出発点における理解の深さである。十分な理解を伴って practice をしていくことが忘却を防ぎ、学習が定着する為に必要である。その為には、(1) 実物、絵、チャート、ジェスチャーなどにより視覚を通して practice をする。(2) 与える cue は、いわゆる英語教室の cue ばかりでなく、現実の世界の cue を与えるようにする。(3) 必要な時は日本語で説明を加える。特に日英両語の差異に起因する日本人の困難点

を説明し、知的理解に訴えることも学習効果を高めるのに有効である。(4)substitution は語から始めて、句、文章にまで及ぶようにする。(5)新文型はできるだけ、既習の単語を用いて、既習のよく似た文型と contrast して教える。(6)既習の文型が再び教科書に出てきた時は、それが前に何課で出てきたか確かめさせ、その文を復習させる。(8)その文型の模範文を暗誦させる。(9)暗誦した文を書かせる。(10)oral composition を多く与える。(11)その文型を応用した英文をノートに書かせる。その際教師は生徒の綴字、文型、句読法など、すべてにわたって、注意してやる必要がある。

高校にあっても、中学の必修文型の定着率は決して充分と云えない。今年本校で中3から高2までを対象にして実施した中学必修文型の作文テスト(別稿参照)においても、学力上位者と下位者の差は大きく開いている。

誤答が多い文型は、その文型が学習困難であるとともに、もう一つは、生徒が低学年において習った文型がしっかり定着しないままに、新しい文型を学習して、その文型もまた完全に習得出来ないという連続消化不良状態で高校へ入学し、今日にいたっているものと考えられる。

このような高校生、特に新入生にはできるだけ早期に中学の必修事項を復習させて、完全に習得させることが必要である。この際問題になるのは高校の文法、作文の教科書である。一部の数科書を除いて、伝統的な品詞分類による配列なので、中学での重要事項である準動詞、比較構文などが2年になって始めてあらわれるものが多い。このことは前述の中学の教科書の際と同様に、学習が定着するので大きな妨げになっている。このような現状のもとで、現在本校では次のようなことに留意して指導にあたっている。

(1)教師は常に中学の教材・教科書についての知識と関心を持って指導に当る。(2)リーダーの時間にも、既習の重要な文型が出てきた時には復習をする。その際簡単な oral composition を課して作文力の養成にも心掛ける。(3)口頭で云わせたことを必要な際には書かせ、時には簡単な応用作文テストを行なう。(4)作文の副教材を選定する時に、文型別に編集されていて、1年の終りまでに中学英語の重要事項、学習困難点の大部分が出てきて復習の出来るようなものを選ぶ。(5)その教科書は Oral Drill のページがあるので、Variation から Selection にいたる Pattern Practice Pupil-Pupil Dialog を積極的に行なって、重要文型の定着、ひいては作文力の強化に努める。(6)作文教科書中の暗記用模範文を暗誦させ、毎時間暗誦とともに暗記テストとして書かせる。(7)作文指導に当って

は、困難点の日英両語の差異に起因しているところが大きいので、日本語と英語との表現上の違いについては充分説明をする。いま一つの困難点である語順については、類似の模範文を思い出させるようにする。

Ⅲ 文法学習における学力差とその指導

中学英語では、いわゆる文法の指導よりも実際の英語の発音、語い、文型などの英語そのものの学習がより重要であることはいうまでもない。文法指導は中学英語の学習を助けるのに必要な程度に留めるべきであろう。あまり文法的な授業になると学力上位者(特に3年生では)は、大きな興味を示すが、下位者にあっては全く理解不可能で、大きな学力差を生ずる原因となる。

本校では文法指導について特に次の点に留意している。

(1)中学では、出来るだけ教科書の例文、その他から帰納的に文法規則を理解させるようにする。(2)その文法規則は単に理解しただけでなく、それを定着させるために oral composition を中心として実際の適用練習を行なう。(3)修飾語の後置、時制の一致などの日本語と異なる点は学習困難点であるので、よく説明し理解させてから練習に入る。(4)文法用語は必要最低限を用いるようにする。(5)文法規則の活用には、単なる機械的な反復にとどまらず、考え、理解して活用するように指導する。

別表1

高校になってから特にむつかしくなった点

(調査対象高1 100名)

単語	58
文法	33
文が長くなった	28
1時間の進度がはやい	16
文型の複雑化	15
英作文	12
R.C.G.の分化	3
発音	3
読解	3
英語らしい表現がわからない	2
文法用語	1

高校にあっては新しく習う文法事項は極めて少なく、中学で習ったことを更に進めるわけである。それにもかかわらず高校新入生の多くが、英文法が難しいというのは、文法教科書の多くが1年生では5文型、名詞、冠詞などの無味乾燥な教材を並べることと、文法用語がむやみに沢山使われていることに起因していると思われる。

高校の英文法指導上留意すべき点として次のことがあげられる。(1)教師はある文法事項を指導する時に、生徒に、中学で、何時、どんなに習ったかを思い出させて、理解を深めるようにする。それには教師が中学英語について充分研究しておくことが必要である。(2)演繹的な学習も有効であるので、必要な時には演繹的な説明をどんどん活用し、精選された練習問題を課すようにする。(3)中学の時と同様、日本語と異なる文法体系については、特にはっきり意識させるようにして理解の徹底をはかる。

IV 自然学級での能力差に応じた指導

中学入門期には殆どなかった学力差は、1年の1学期の後半から開き始め、学年進行とともに学力差は大きくなっていく。能力別授業が有効であるとしても、現実には諸種の制約のために、能力別授業をすることはなかなか困難である。こうした現状でわれわれは、自然学級での授業で能力差に応ずる指導を研究実践する必要がある。指導に当っては次の諸点に留意することが望ましいと思われる。(1)集団教育でありながら、その中に個人的指導の長所をできるだけとり入れるようにする。具体的には、練習問題は口頭だけでなく、ノートに書かせてみる。書くことにより学習の理解が深まるとともに、教師はそのノートを見ることにより、生徒各人の理解程度が把握出来て、適切な指導をするのが容易になる。(2)宿題を課す時には、種々の困難度の問題を適当に組み合わせる。点検する際にも、その問の困難度に合った生徒に指名するよう注意するのは、当然なことである。(3)概ね等質の少数生徒（特に学力遅進生徒）に昼休み、放課後などに特別指導を加える。しかし自然学級での一せいで授業で学力に応じた十分な授業をすることは極めて難しい。その原因としては次の二点が考えられる。一つには、中・高ともに学級規模が大き過ぎて能力差に応ずる個別指導がやりにくいことであり、もう一つには未だ自然学級の中で能力差に応じた授業を実施するための教育技術、教育理論が確立されていないことである。

V 能力開発と能力別学級編成について

わが国で現在もっとも忘れられているのは、能力開発——英才教育の面ではなからうか。たしかに教育の機会均等と、各人の能力を充分開発することは、どちらも重要なことであり、世界各国において種々の試みがなされている。しかるに日本にあっては教育の機会均等、平等を強調するあまり、能力別学級は生徒を差別するものであり、非民主的だと毛嫌いする風潮がないでもない。しかし能力差の大きい生徒を集めて一せいで授業をするのと、能力に応じた指導をするのと、どちらが生徒に親切であり、どちらが真の平等な教育か考え直してみるべきであろう。Conant Reportにおいても、優秀生徒を伸ばすために、学科ごとの能力別編成を勧めている。もちろん下位生徒をひきあげ、学力差を少なくしていくという治療的指導は、英才教育に劣らず重要なことはいうまでもない。

能力別編成をする場合には、種々の編成の仕方が考えられる。(1)IQを基準としたもの、(2)その教科の学力を問題にするもの、(3)全教科の総合的学力を問題にするもの、(4)学習意欲を学力に加味したもの、(5)進路を考慮に入れて学力を考えるものなどがあげられる。さらに学力も、絶対的な学力を基準にするのか、クラスでの相対的な学力を基準にするのかも問題になるところである。次に能力別編成をする際問題になる生徒の劣等感、差別感の問題は、事前に能力別編成についてよく説明し、特定の2、3教科に限って一教科ごとの能力別編成をして、他の科目やHRは自然学級編成で授業を受けるようにすれば、比較的影響が少ないようである。

VI 本校の能力別指導の現状

本校では、研究紀要10集に報告したように、数年前から高3に対しては $\alpha\beta\gamma$ の三段階能力別編成をしている。本校での優秀生徒、遅進生徒とは、原則的には学年の平均学力よりすぐれているもの、劣っているものことである。いわゆる「相対的学力優秀生徒」、「相対的学力遅進生徒」である。しかしながら、この見方をすると、どんなに成績不振の学年にあってても、学力優秀生徒は一定割合出現するし、どんな優秀な学年でも、かならず学力遅進生徒が出現することになって不合理である。そこでわれわれは、「相対的」な考えを基準としつつも、別に学習指導要領などを参考にして、一定の到達目標学力水準を設けて、これを参考にして「学力優秀生徒」「学力不振生徒」を定義する

ことにした。 $\alpha\beta\gamma$ は高2の成績を総合的に検討してきめている。なお、この編成は固定したものでなく、学年の中途においても、学力の上昇、下降に伴ってクラスを変わることが出来るようにしてある。編成に当たってクラス間の境界線附近の生徒の組み分けに苦労するが、この他クラスへの移動によって大した問題もなく弾力的に運営されている。

指導に当たっては、 α と β は教材は同じものを用い、 γ は、それより易しい教材を用い、基礎的な重要事項を今一度復習して基礎をしっかりと固めるよう留意している。

α と β においても単なる進むスピードの違いに終らぬよう注意し、 α では教材全体を理解させるとともに、さらに発展的応用の力をつけるような指導に心掛け、 β では何よりその教材を正確に徹底的にマスター出来るような指導に重点をおいている。

Ⅶ 能力別学級編成はいつから始めるのが望ましいか

単なる英語の学力差からだけ問題にすれば、中2の最初から、遅くとも中3から始めるのが望ましいと思われる。しかし、中学においては次のような種々の問題のために実現はかなり難しいようである。(1)現在の高校入試の状況では、ややもすると「能力別」でなく

「進路別」編成になってしまうおそれがある。(2)年令的にみても劣等感・差別感を持ちやすい。(3)両親の理解が得られ難い。(4)教官・定員・教室が不足している。

高校にあっては、本校のようなかなり学力差の大きい生徒構成の学校では、出来ることなら入学当初から実施した方が望ましいと思われる。教官定員、教室などの関係で入学当初から不可能としても、可及的速かに実施するのが望ましいと思われる。また上下差の小さい学校にあっては、潜在的能力はありながらも、何かの事情で中学時代に英語の学力のみが充分でない生徒を、他の生徒の水準まで引きあげることが必要である。このような場合にはむしろ入学当初にこそ能力別指導を実施すべきであろう。

Ⅷ 今後の見通し

現状では各個人の能力に応じた指導について充分とはいえない。単に能力別に組み分けして、一せいに授業をしただけでは、真の指導とはいえないからである。われわれは、教材・授業方法・評価などあらゆる面でさらに研究を進めなければならない。特に教材のプログラム化、ティーチングマシン、LLなどの教育工学理論、機器の活用には今後充分研究する必要がある。